

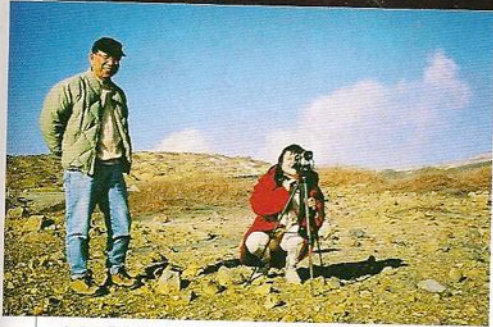


BRIGITTE LEMAIRE フランスの映画作家。ジャン・ルーシュとジャン・ポードリヤールに師事、82年に社会学博士号。88年から手話の世界と聴覚障害者をテーマにドキュメント映画を制作、フォト・ロマン形式の作品も発表している。98年には『井上孝治——表徴を越えた写真』制作で日本滞在。撮影中の次作は、アメリカで研究が進む、障害者の図形認識能力に関する記録映画だという

ろうあ者の写真表現に 対話という作用の深み 井上孝治と仏映画作家

▶ 嵩 聡子

懐かしい風景の記録者として近年評価の高まった、ろうあ者のアマチュア写真家・井上孝治（1919～1993）。彼に関心を持ち、記録映画を制作したフランス人女性がいる。映画作家のブリジット・



さる1月中旬、日本のテレビ取材をうけ、井上孝治の遺族とゆかりの地を訪ねたルメーヌさん©Hajime Inoue

ルメーヌである。聴覚障害者のコミュニケーションを考え続ける彼女に、ひとりの日本人写真家を取り上げるにあたってのプロセスを聞こうとパリ郊外に訪ねた。

96年と99年に井上孝治に関する2つの短編映画を発表した彼女は、聴覚障害者と手話の世界をテーマにこれまで11本の短編を発表している。彼女自身は健聴者ではあるが、聴覚障害を持つ祖父母と幼少期を過ごした経験を持ち、自分の初めての子どもが同様の障害をもつかもしれないという個人的危機を体験した後、このテーマに取り組みようになったという。

96年発表の『私を見て下さい、私もあなたを見ます——耳の不自由な写真家・井上孝治』は前年発

表の短編にひきつづき、聴覚障害を持つ芸術家を紹介するものだ。この16分のモノクロ作品は、93年にアルルの写真フェスティバルに招聘されたものの、この地を踏むことなく他界した井上へのオマージュとして構想された。井上の作品と生涯を当時制作中の短編に組み込むより、独立した一本の作品として仕上げたいと考えた彼女は、民族学映画の先駆者である師、ジャン・ルーシュの助言を受けてシナリオの執筆に着手した。フランス語のシナリオを手話に翻案し、リズムを作り上げるのにひと月余りかかったそうだ。

手話による静かな問いかけはこの作品において重要であり、その静寂なナレーション部は写真家の作品と生涯を彩る情景と対比をなす。説明的なシーンは最小限に抑えられ、一種の様式美さえ感じさせるこの作品は、ブカレスト国際ドキュメンタリー映画祭での最優秀賞をはじめ、米国、欧州各地で高い評価を得た。

「写真というものが、かくも直截的に語りかけてくることに驚愕を覚え、同時にこれこそろうあ者の写真だと確信しました」と、アルルでの井上の作品との「出会い」を彼女は回想する。

聴覚障害者の世界には固有の文

化と独特のコミュニケーションがあり、井上の写真にはそれが端的に現れている、という彼女の発言が、私にとって直接話を聞ききつかけとなった。写真も本来、手話と同じように言葉から解放された存在であり、健聴者の写真と聴覚障害者の写真の違いがあることなど、この文化を知らぬ私には思いもよらなかつたからだ。井上の写真にみられるろうあ者独特の感性を、彼女は以下のように分析している。

「手話の世界では表情やしぐさが重要な意味をもつことから、井上の人物写真における無限といえるほどの表情の多彩さは特筆に値します。ほかの写真家、たとえばカールティエ・ブレッソンやド・アノアの作品では人物の表情のもつ幅はある程度限られています。また、

「彼の作品を通して、自分のなかのろうあ者的な感性やものの見かたが明確になってきました。かつては『他者』としてとらえていた文化に自分が属することをあらためてとらえたのです」

©Eve Kitcher

